

今週のお薦めレコード

このレコードを聴きタイ



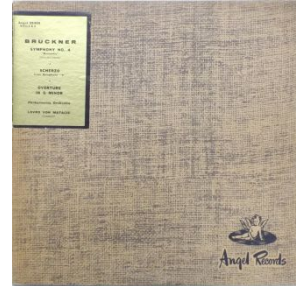
第8033番 税込み22000円



ベートーヴェン 交響曲第7番、プロメテウス序曲
ウィーン・フィル／アバド
英デッカ／SXL6270／1966年録音／ステレオ
アバドの英デッカ・デビュー録音。

前年マーラーの第2交響曲を振ってザルツブルク・デビューを果たしたアバドがその翌年デッカに録音した話題盤である。カンテルリを失ったイタリアに期待の新星が誕生し、それに見事に応えた彼はやがてベルリン・フィルまで手に入れた。演奏家は一枚のレコードでも決して手が抜けない。一度躓けば10年の年月を失うだろう。このレコードは若いアバドの渾身の努力の結果であり、譜読みの深さ・完璧さで高く評価されていた彼が、すべての音符そして休符の意味を理解して力の配分に従って演奏している。それでいて、そうした気の使い方は全く見せない自然な流れが見事である。(山田)

第8034番 税込み13200円



ブルックナー 交響曲第4番『ロマンティック』
同第0番からスケルツォ、序曲 ト短調
フィルハーモニア管／フォン・マタチッチ
米エンジェル／35359-60／バラ2枚組／英プレス／
1954、56年録音／モノラル／G

イギリスでは余白のスケルツォと序曲が未発売。オリジナル33CXは大変な入手難レコード。この数年後マタチッチはスラヴ・オペラ日本公演で来日し、初めて日本の愛好家に知られるようになる。やがてN響を振った多くの名演奏が我々の記憶に残るが、シュリーヒトと並ぶブルックナー指揮者としても良く知られる。シュリーヒトの透明さに比して彼の演奏は膨らみがあり温かい。また、常に全体に目を配り、それぞれの部分が全体の中でどのような意味を持つかと言うことに配慮する。つまり出来上がった演奏はまとまりが良いということだ。(山田)

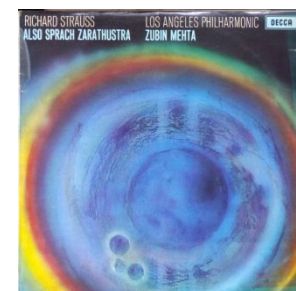
第8035番 税込み11000円マーキュリー



『パレー／フランスの名行進曲』 ベルリオーズ、
シャブリエ、サン＝サーンス、フランス国歌
デトロイト響／パレー
英マーキュリー／AMS16077／英EMIプレス／
1959－60年録音／ステレオ／G

10年間でデトロイト響を見違えるように鍛え上げたパレーがマーキュリーに残したフランス物の名演奏は、すべてがレア盤である。彼は60代半ばであったが、これらは全く年齢を感じさせなく、角の取れた洒脱な演奏からアメリカのオーケストラのレスラーのような豪快さは聴かれない。国旗の三色に彩られたジャケット・デザインからイメージされるフランスの誇りをここに感じる。指揮棒の先からフランスの香りでも流れたのだろうか。これを指揮の魔術と言う。またこのレコードはイギリス EMI のプレスでもあることに意味があるのだ。(山田)

第8036番 税込み8800円



R.シュトラウス ツァラトゥストラはかく語りき
ロス・フィル／メータ
英デッカ／SXL6379／1968年録音／ステレオ／G
このラージ溝無しラベルでオリジナル。

シカゴ響の音は豪快だが、ロス・フィルの音は輝かしい。このレコードは有名な『惑星』と並ぶオーディオファイルである。多くの愛好家が既にスピーカーを鳴らしているようだ。だが、メータはそれだけではない、オペラ指揮者としても偉大な彼は、豊かな表現能力を持っている。R.シュトラウスの音楽はオペラのひとと言でメータと通じる部分がある。巨大な場面も興奮を呼ぶが、やがて静まった時もまたメータの聴き所である。艶やかなヴァイオリン・ソロが流れてきたときは誰もの心が癒される。甘い響きはコンサート・マスターのディヴィッド・フリシナが運んでくるのだ。そして再び宇宙的世界へ。(山田)